

〔太平記二十六〕正行參吉野事

安部野ノ合戦ハ、霜月〇三年正平廿六日ノ事ナレバ、渡邊ノ橋ヨリセキ落サレテ、流ル、兵五百餘人、無甲斐命ヲ、楠行正ニ被助テ、河ヨリ被引上タレ共、秋霜肉ヲ破リ、曉ノ氷膚ニ結テ、可生共不見ケルヲ、楠有情者也。ゲレバ、小袖ヲ脱替サセテ、身ヲ暖メ、藥ヲ與ヘテ疵ヲ令療、如此四五日皆勞リテ、馬ニ乗ル者ニハ馬ヲ引物具失ヘル人ニハ、物具ヲキセテ、色代シテゾ送リケル、サレバ乍敵、其情ヲ感ズル人ハ、今日ヨリ後、心ヲ通ン事ヲ思ヒ、其恩ヲ報ゼントスル人ハ、軀テ彼手ニ屬シテ後、四條繩手ノ合戦ニ討死ヲゾシケル、

〔常山紀談〕大永年中、細川武藏守高國と稱す入道永三好左衛門督と相戰ふ。○中略。高國の軍破れたり、高國の將荒木安藝守百ばかりの兵を引わかつち。○中略。いく度となく戰ひたるに、敵討るゝ者數をしらず、荒木主從一人ものこらず、討死しける間に、高國僅に近江にのがれ得たり、荒木平生士卒を愛するに、惱情を盡せり。古への食を分、衣を解、樂を同し、苦を共にするの風あり、少しの功ある人をすてず、ある時、荒木が玄たしきゆかりある人と、荒木が士のかろき者と、俱に疫痢を煩ひけるに、療養力のかぎりに心を付て、ゆかりある人よりも、まさりければ、これを恨けり、荒木縁者はわれ問ずとも、心を附る人あり、わが何がしは賤しいやしき者は、人おろそかにせん、われ心を盡さずば、療養おこたりあらん、縁者をおろそかにするには非れども、先重き處に、心を盡せるなり、無事の時は縁者玄たしといへども、事ある時は、士卒の切なる故なり、玄たしき一族ゆかり有とても、陣々わかれれば、互に死生も玄られず、士卒は戰場に死生を共にするものなれば、一人とても、本意を失ん事、わが大なる患なりと答けるを、士卒聞て、人々恩を思ふ事、骨髓に徹せりとなん。

〔武將感狀記五〕一氏綱條北伊豆ニ攻入時、アル里ノ家ゴトニ、二人三人病ヲシケル、其故ヲ問セラ